

“少女たちは世界を変える”

2021 年 10 月 30 日（土）大妻女子大学本館 E 棟地下 1 階 055 教室にて開催

瀬戸内寂聴 若草プロジェクト代表呼びかけ人 メッセージ動画上映



主催者挨拶

村木厚子 若草プロジェクト代表呼びかけ人



皆さま、今日は若草プロジェクトのシンポジウムにご参加・ご視聴いただき、本当にありがとうございます。
若草プロジェクトは、生きづらさを抱え、SOS を発することができないでいる少女たちを支援するために生まれた団体です。オルコットの『若草物語』から名前をもらいました。4 人の姉妹がそれぞれ自分らしく自分の人生を選び取っていく物語です。原題の「リトル・ウィメン」は、ガールでもなく、レディでもなく、彼女たちを大人の女性として尊重するという気持ちが込められていると聞いています。私たちも尊敬の念をもって少女たちを応援していきたいと思っています。

5 年半の活動の中で私たちを応援してくださる、たくさんの個人の方、企業の方、役所、志を同じくする団体の方々と巡り合うことができました。今日のシンポジウムも、大妻女子大学の共生文化研究所に共催いただき、この会場をお借りしています。そして、株式会社朝日エルさんにずっと企画や運営と一緒にやっていただきました。そして、多くの関係者の方々に後援いただき、なによりもたくさんの企業の方に協賛いただいて、開催することができました。改めて心から御礼を申し上げます。

さて、10 月 11 日は国際ガールズデーです。若草プロジェクトも、このガールズデーにちなんで、ぜひ 10 月にシンポジウムを開きたいということで、今日の開催にこぎつけました。ガールズデーが始まった一番最初の理念として、「少女たちは世界を変える」が掲げられました。私たちも少女たちと一緒に世界を変える手伝いをしたいと思います。その一つのきっかけとなるシンポジウムにしたいと思います。どうぞ皆様のご協力をよろしくお願いします。

共催者挨拶

伊藤正直 大妻女子大学学長



若草プロジェクトのシンポジウムを大妻で開催するのは 2 回目になります。一昨年の 10 月に開催しまして、去年も開催する予定だったのですが、残念ながらコロナで中止となりました。そして今年は、このような形で開催出来ることを嬉しく思います。

村木さんに顧問を務めていただいております共生社会文化研究所が共催という形になっております。

共生社会文化研究所というのはまだ新しい研究所なのですが、共生社会の実現をめざして保育や地域共生や障害者雇用やメンタルケア、そして、女性のウェルビーイング、より良き女性の生き方をめざすこと等をテーマにしております。

男女共同参画法ができて 20 年以上、女性活躍推進法ができて 5 年以上経ちます。しかし、法律ができただけでは、なかなかジェンダー平等や女性の活躍が実態として推進されていく状況にはなっていません。コロナの中で女性の貧困や生きづらさや困難が増しているという報道や調査もあります。とくに、若い女性の困難が広がっているとも聞いております。だからこそ、必ず世の中は変わると希望を持って女性の活躍を推進していくことが大事だと思います。私どもも女子教育機関として若草プロジェクトと一緒に歩みたいと思っております。



第1部 「応援団の応援団」としての挑戦

少女たちの応援団を応援するために

村木厚子 若草プロジェクト代表呼びかけ人



若草プロジェクトの活動は6年ほど前、「私たちがやり残していること、今やっておかなきゃいけないことは何かしらね」という瀬戸内寂聴さんからの問いかけにより始まりました。

若草プロジェクトはこんなふうにはじまった



私たちが、やり残していることは何かねえ・・・
女の子が心配だよねえ・・・
SOSが出せないでいるよねえ・・・
支援団体もみんな苦労しているよねえ・・・
何とか横につながれないか

みんな動き始めた

- 行政が・・・
- 企業が・・・
- 若者が・・・



大谷さんと私は、「女の子のことが心配だよね。いろいろ生きづらさを抱えているのに、SOSを出せないでいるよね」「支援団体もたくさんあるけど、どの団体も小さくて、みんな苦労してるよね」「そうだ、女の子たちの応援をしよう！」「支援者同士も横につながりたいね」・・・こんな話をして、プロジェクトを立ち上げることにしました。

代表は大谷弁護士です。瀬戸内寂聴さんと私は代表呼びかけ人として旗振り役をさせていただくことになりました。そして、多様なメンバーが理事や呼びかけ人として参加してくださっています。今日、ご登場いただく上野千鶴子さんも呼びかけ人のお1人です。

私たちが「女の子のことが心配だよね」と言い始めたのには背景があります。日本の子どもの6～7人に1人が相対的な貧困の状況にあると言われています。貧困というのは連鎖をしていきます。虐待の通報、相談件数は現在20万件を超えました。16万件くらい相談があった年の数字を追いかけると、一時保護をした子どもが2万5千人くらい。施設や里親さんのところに預けられた子がだいたい5千人くらいです。完全に親から引き離す子は、相談件数のうちの3%にすぎません。それ以外の子は相変わらずお家で暮らしています。

貧困や虐待などの状況にある子たちは、やがて「なんとかひとりで生きていけないだろうか」「家を出られないだろうか」と考えたくります。とりわけ女の子の場合は、そう思ったときに、「泊めてあげるよ」「うちで働かない？」という声もかかってくるわけです。

家出して、たとえばJKビジネスとか風俗で働いている子について、皆さんはどういう印象を持たれるでしょうか。やっぱり「悪い子」「ちょっと特殊な子」「モラルが低い子」、そんなふうに見られがちだし、哀しいかな、本人も自分はそういう子だと思っていることもあります。

でも、私はやっぱりそうは思わない。私事になりますけれども、私は小学生の高学年くらいの時から、家庭の事情が複雑だったこともあって、ものすごく家出願望が強かった。とにかく家出したいと思っていて、幼いながらに家出をしてひとりでも食べていける職業を一生懸命考えました。当時思いついたのは、住み込みの子守り、もうひとつはホステスでした。50 年前の高知という地方都市で、その願いはかなうべくもなく、その後、私はだんだん合法的な家出という方向に自分の方針を変えていったわけです。もし、あの時の私が今、この時代、東京に住んでいたら、携帯電話を持っていたら、家出先が簡単に見つかるかもしれないし、中学生、高校生になると、危ないところでアルバイトができたかもしれません。彼女たちが変わったわけではなく、社会のリスクがとて高くなっているのだと思うます。

私は、そういう子たちは、「悪い子」ではなくて、「ひとりで闘っている子」だと思っていますし、50 年前の私自身でもあると思っています。彼女たちは私たちの地続きにいる子たちです。

そういう子たちの支援をしたいということで、若草プロジェクトの活動の柱は 3 つです。

まず 1 つ目は「つなぐ」です。生きづらさを抱えた少女や若い女性と支援をつなぎたいと思っています。

LINE 相談のほか、若草ハウスをはじめいくつかのシェルター、住まいの場を運営しています。最近、簡単に立ち寄られる居場所として「まちなか保健室」をつくりました。これは、学校の保健室が学校の外にあったらいいのに、という声に対応しました。「つなぐ」の活動は、少女と支援をつなぐだけではなく、支援者同士がつながる、そして、この問題を理解してくださる企業さんと全国のさまざまな支援の場をつなぐという方向に今発展しつつあります。

活動の 2 つ目の柱は「まなぶ」です。少女たちの現状をしっかりと理解し、その背景も知って、彼女たちから信頼される大人になるための研修会を実施しています。今はコロナでフェイス・トゥー・フェイスの研修会ができないので、「若草チャンネル」という YouTube のチャンネルでいろんな情報発信をしています。

活動の柱の 3 つ目は「ひろめる」です。学んだことを広く皆さんに知っていただく。シンポジウムもその活動の一環です。

活動を始めて 5 年半、哀しいかな、私たちが「女の子が心配だよ」と直感的に思っていたことがとても正しかったということが、コロナの中で見えてきました。

コロナが女性にどんな影響を与えたかを内閣府が分析したところ、まず、DV が 1.5 倍に増えています。次に、サービス業や小売業を中心に女性の雇用が大きく減り、とりわけ女性の非正規雇用者が打撃を受けました。それらも影響してだと思いますが、悲しいことに、女性の自殺が急速に増加しました。元々男性の自殺率の方が高いのですが、女性の自殺率の急増は、今回のコロナの非常に大きな特徴です。

職業で見ると、無業の方、主婦の自殺が大変増えています。そして、女子高校生の自殺が大変増えている。それ以外にも、男子高校生や男子大学生、女子大学生などの自殺が増えています。

「同居の家族がいる」「経済力が弱い」人の自殺が増えたのは、今回のコロナの大きな特徴だったかなと思います。

我々がやっている LINE 相談でも、以上のことが見えてきました。去年の 4 月の終わりに相談が急増し、LINE 相談の開催日を拡げて、特に専門家を中心に自宅から LINE 相談を毎晩受けてもらうというのを

ある時期続けました。メンタルの相談と家庭内の問題の相談が大変増えました。年代では 10 代後半、20 代前半の人たちの相談が大変増えています。

「コロナの影響で 1 か月仕事のシフトが入りません」「コロナで家にいなければならず、居場所がありません」「逃げ場がないです」ステイホームの影響がこんな形で出ていました。

「死んでしまいたい」こんな言葉も書かれていました。

相談に当たっている弁護士さんの 1 人が私にこう教えてくれました。

「彼女たちは、元々崖のそばに立っていた子たちだ。それがコロナでさらに崖っぷちにどんどん追いやられている。さすがにこのままでは崖から落ちると思って、勇気を出して相談してくれた子もいた」。

コロナがいろんな危機をあぶりだしている中で、もしそれが SOS につながったとしたら、そこを私たちはしっかりつかまえたいと思います。

それから、虐待で児童養護施設や里親さんのもとで育ち、そこを巣立った人たちの支援をしている人が、心配だったので食料を送ったら、お礼の電話がかかってきて、「食べることに困ってた」と言われたそうです。「いつでも相談してね」と言っても、それまでは絶対電話がかかってこなかったのが、食べ物を送ったお礼という口実があったから、実は…と相談につながったと言っていました。

こんな時だからこそ、子どもや若者、とりわけ少女たちを応援したい。そして、「応援団の応援団」をつくっていきたいと思います。うれしいことに、少しずついろんなところが動き出しています。女性が、企業が、若者が。たった 5 年半ですけれども、私たちは活動をしている中で、若年女性の支援はみんなでやらないとできないなど実感するようになりました。

日本フィランソロピー協会によると、今の日本では、何か社会的な問題が起こって解決できないと、「行政は何をやってるんだ」という批判が繰り返される。でも、これからは、行政も、志ある企業も、若草プロジェクトのような小さな NPO も、つまり、市民が市民の社会の問題の解決にみんなでチャレンジしていくようにならないと大きな課題は解決できないとのこと。そのとおりだと思います。

流行の SDGs でも、各国政府も、NGO も、企業も、みんなが取り組むことが求められています。そして、目立ちませんが、17 ある目標の中の最後、17 番目はパートナーシップです。若草の活動はジェンダー平等だけでなく、貧困とか教育とか、たくさんの目標とリンクしています。皆さんとのパートナーシップによりこの問題を解決していきたいと思います。

この後、企業が、そして社会が、どんなふうに関わろうとしているかを各プレゼンターに話してもらいますが、その前に、行政もやっと動き出したところを私から解説したいと思います。

少女や若い女性がこんなに大変なのに、行政は何をしているのか。そのとおりです。ただ、この問題は、実は制度のはざまにあって、児童福祉というのは 18 歳までです。そこを超えると、DV とか婦人保護法（これは売春防止法をベースにした仕組みで、悪いことをした人を処罰して、その後更生を手伝う法律です）のような法律しかなく、ひとりで闘っている女の子をみんなでちゃんとサポートしようという法律はありません。

幸いなことに、行政も気がついて、厚生労働省に検討会が設置され、売春防止法ではなく、新しい

女性支援法をつくったほうがいいという中間報告が出るころまで来ています。

法制化されるには国会で審議されないといけない。この選挙の大きなテーマになってはいませんが、皆さんが声を合わせて応援してくれば、新しい国会議員の人たちがきっとこの問題に取り組んでくれると信じています。ぜひ皆さん、応援をお願いします。

行政はこんなふう動き始めています。社会全体の認識はどうか。このあと NHK の福田さんに社会の動きをレポートしていただき、若草プロジェクトの理事の福田から、企業と我々がどう連携を始めたかについて説明させていただきます。

少女たちは世界を変える。これが実現できるかどうか、皆さんと一緒に考えたいと思います。

「生理の貧困」社会はどう動いた？

福田和代 NHK 編成局展開戦略推進部部长



去年（2021 年）12 月放送の NHK スペシャル「コロナ危機 女性にいま何が」という番組を制作するにあたり、コロナ禍で女性がどのような影響を受けているのか取材を進めていたのですが、ある日、ディレクターの一人から、「福田さん、たいへんなことが起きています」という報告があがってきました。フードバンクや女性の支援団体に話を聞いたところ、支援用品の中で生理用品がすぐになくなっちゃうというのです。

当時、欧米では「生理の貧困」がすでに社会問題化していて、対策を求める女性たちの声が大きくなり、国を動かしていました。2020 年 11 月、英・スコットランド議会は自治体などに生理用品の無料提供を義務づける法案を可決。フランスでは国費を投入して学校での無料提供を決定していました。

では、日本はどうか。2020 年の秋当時、「生理の貧困」に関する認知度はほぼゼロでした。学校や行政などを取材しても、「生理の貧困？ なんですか、それ」と逆に聞かれるばかり。生理用品に関する相談など受けたことは？と尋ねても「ないですね」と一蹴。保健室に生理用品を借りにくる子がいると、「必ず返すように」と指導している学校も少なくないようでした。生理用品を持っていないのは、自己管理ができていないからだと考えられていたのです。

私たち NHK の局内でも、「今の日本に生理用品を買えない人がいるの？」「特殊な事情があるのでは？」と言われ、番組にすべきだと提案したものの、なかなか実現しませんでした。

そんなとき、生理に関する啓発活動が続けている「# みんなの生理」さんと知り合いました。消費税が 10% に上がるときに「生理用品を軽減税率に」という活動を始めた団体さんで、署名運動を進めるうちに、窮状を訴える様々な声が届きはじめたそうです。その中には、「節約するために生理用品にトイレットペーパーを巻いて使っている」「親に買ってもらえない」「夜用 1 個を使っていて、痒みと臭いが大変」という声もあったそうです。

私たちが取材をしても、リアルな世界ではこういう声は全然聞こえてきませんでした。生理は恥ずべきもの、隠すべきものだとタブー視されていたため、声を上げにくくて、人前では言えなかったのです。ネット上に集まる切実な声に触れ、「生理の貧困」はずっと社会の中にあつたのに、見えないもの、存在しないものとして扱われてきたのだと気づきました。

一方、「# みんなの生理」さんも、この問題を何とかしなくてはならないと行政に働きかけたそうですが、全然話を聞いてもらえなかったそうです。

そこで私たちは一緒にこの問題を可視化しようと動きました。「# みんなの生理」さんは SNS で呼びかけて、アンケートを実施。対象は 4 年制大学、短大、大学院、専門・専修学校に在籍している方で、過去 1 年に生理を体験した人です。その結果、経済的な理由で 5 人に 1 人が生理用品の入手に苦労しているという実態が明らかになりました。

私たち NHK は、「生理の貧困」の当事者の取材を進め、専門学校生のさくらさん（仮名・19 歳）の声を伝えました。彼女は学費や生活費を自分で支払っているのですが、コロナでバイトのシフトが大幅に減ってしまったために生理用品が買えなくなり、トイレットペーパーでナプキンやタンポンを自作していると話してくれました。

実態調査と当事者の声を 3 月 4 日の「おはよう日本」で伝えたところ、本当に大きな反響を呼びました。この放送をきっかけに、「生理の貧困」が顕在化し、SNS で拡散されるとともに、リアルな世界も動かしていきました。

例えば、千葉県内の女性支援団体。これまで「生理の貧困」を意識していなかったけれども、自分たちが支援している人たちに状況を聞いてみたら、「夫から経済的に DV を受けて生理用品を買わせてもらえなかった」という人がいたことがわかった。「身近なところにも生理の貧困に直面している人がいる」「こんなことまで起きている」ということが、ネットや口コミでどんどん広がっていった、国会や地方議会でも「生理の貧困」に関する質疑が相次ぎました。

支援の動きも迅速です。今では全国の自治体の 3 分の 1 にあたる 581 の自治体が「生理の貧困」に対して支援を打ち出しています。国の「骨太の方針」などにも対策が明記されました。大学生、若者たちも独自に調査するなど、「生理の貧困」に関する支援は急速に広がっています。

ただ、課題もあります。「生理の貧困」という言葉は“パワーワード”であるがゆえに、経済的な貧困という一面的な理解にとどまってしまう。また、「なぜ生理の貧困だけ救済するのか。ほかにも苦しい状況はあるじゃないか。男だって大変だ」という声も上がりました。さらに、「スマホを持っているのに、生理用品が買えないのはおかしくないか？」というバッシングも起きています。

そしてもう一つ、皆さんにぜひ考えていただきたいと思っているのが、「無意識の男性中心主義」です。「# みんなの生理」さんが学校関係者に、「誰でも使えるよう、トイレに生理用品を設置してもらえませんか」と頼んだところ、「男子生徒がいたずらするから難しい」という回答が来たそうです。男の子がいたずらするからといって、なぜ女の子が我慢しなくちゃいけないのでしょうか。無意識のうちに男の子中心に考えてしまう傾向があるんじゃないかと思います。

いろいろ課題は残っていますが、「生理の貧困」については、「# みんなの生理」さんという若い女性のグループの奮闘があり、そして NHK の若い女性の取材者が彼女たちと手を携えて動いたことで、問題が顕在化し、社会を動かしていったのです。女性たち、がんばりました！

企業と支援施設をつなぐプラットフォーム「TsunA がーる」

福田万祐子 若草プロジェクト理事

虐待、貧困、いじめ、DV、性的暴力、ハラスメント、教育虐待…。少女たちを取り巻く問題は複雑で、その広がりにはコロナがさらに拍車をかけています。全国にはさまざまなアプローチで少女たちを支援している施設・団体がたくさんありますが、どこも財政基盤が弱く、少ないスタッフ、限られた資金で懸命に支援活動を続けています。どこも秘匿性が高く、他の施設・団体との情報共有や、社会に広くつながり、支援を求めることが困難です。若草プロジェクトでは、さまざまな支援施設と、少女たちに心を寄せてくださる企業をつなぎ、その企業が本業で持っている力、物品やサービス、技術、人材、知財などをつなぐ活動を通して支援基盤を強化し、少しでも支援施設とその先にいる少女たちの力になればと考えてまいりました。

支援施設で必要とされる支援は多種多様です。また、企業の支援が個々の小さな施設に届きづらい、持続的な支援につながらない、望んでいる支援とは違うものが届く、緊急のニーズには対応できないなど、いろいろな課題があります。支援施設からは、「施しのような形での支援では少女たちがエンパワメントされない。ご提供いただける支援の中でも、自分たちが必要なものを選び取って、いい形で支援を受けてこそ、初めて本当のエンパワメントにつながる」という要望が寄せられています。

こうした課題を解決するために、2020 年度、日本財団様のご支援と、日本産業パートナーズ様、日本生命様からの資金援助を受けて、「TsunA がーる」というプラットフォームを開設させていただきました。このプラットフォームを通じて企業からの支援とニーズのマッチングを行い、e コマースのように少女たちが欲しい支援を選べる形で提供することができればと考えています。

2018 年より「若草×服のチカラプロジェクト」を共催いただいているファーストリテイリング様からは下着や衣料品を寄贈いただき、「服のサイズも選べ、大きなサイズもたくさんもらえて大変助かった」「新しい服を着て就職活動に行かせることができた」と施設から感謝の声をいただいております。また、顕在化された「生理の貧困」に対応して、ユニクロの新商品である吸水サニタリーショーツが全国の少女や女性たちのもとに届けられました。

ハウス食品グループ様からは、施設の食に関する困りごとのアンケートを全国 321 の施設に実施していただき、災害時の備えにまで手のまわらないシェルターや婦人保護施設などに緊急非常食の配布の支援をいただいています。

このプラットフォーム開設に当たっては、企業との連携についていろいろとご尽力いただいている日本生命様など多くの企業にご尽力いただいています。ほかにも、日用品をご支援いただいている大王製紙様、季節ごとにお洋服やイベントを提供してくださるタキヒヨー様など、さまざまな企業が私たちの活動に参加してくださっています。

Girls have the potential to change the world.

少女たちは本当に世界を変えられるのでしょうか。

ここに 1 通の手紙があります。ユニクロ・GU で行われたファッションイベントに



参加した少女からの手紙です。

今回は素晴らしいプロジェクトに招待していただきましてありがとうございました。

最近コロナの影響以上に対人関係に問題を抱えており、集団で外出をするのは大きな決断でした。人との距離をつかむことの難しさだけが自分の中の課題だと思っていましたが、あの1時間で、自分に足りないコミュニケーション能力の基本的な問題があることにいくつかの発見がありました。

人の顔と職種、名前を合わせて覚えられない。大勢の人を前に思うように言葉にすることができない。自分の思っていることの半分も言えない。自分の発言のあとに人が何を述べたのか、一切記憶がない。なによりも以前から心理士に指摘されていた自己評価の低さからくる自信のなさ、自尊心の低さを痛感しました。何が自分に足りないのか、理解できた大きな経験でした。

あの日から1週間あまりが経ち、社会復帰に向けて自分で動き出そうという意欲がわいて、生活も一変しました。相変わらず対人関係の問題に向き合う勇氣はないのですが、ずっと劣等感を抱えていたことに向き合い始めたことで、施設でサポートしてくれる方々からは『最近表情が明るくなったね』と驚かれています。何にも代えられない素晴らしい機会を与えてくださり、ありがとうございました。

生きづらさを抱え、孤独の中にある少女たちは、生きる意味を見いだせず、死にたいとまで考えています。でも、周囲の理解が得られ、企業や社会からのエールがあれば、この少女のように、暗い闇のような世界から小さな一歩を踏み出し、いつの日か自分のいる世界を変えることができると感じます。生きづらさを感じずに過ごしている少女たちも、笑顔の少ない、悩んでいる人に声をかけ、自分ができる小さなアクションを起こせば、彼女の周りの世界は少しずつ変わっていきます。そして、少女たちが成長し、社会に出たときに、学校や職場で、少女たちの連携により大きな世界を変えることができると私は信じています。

学生時代、不登校の友人に「大丈夫？」と声をかけたことにより、友人が学校に来るようになった。その体験と「小さな自分でも何かできることがある」という想いを秘めた若い女性社員のアクションから、タキヒョー様と若草プロジェクトのつながりは始まりました。顧客ポイントが寄付になるGUマイレージプログラムでも、男女比は定かではありませんが、10～20代からの寄付率が高いと聞いています。

日本生命様から「まちなか保健室」にいただくたくさんのアウトリーチの商品の中でも人気が高いのは、社名ロゴが入った消毒液やマスクだと聞いています。マクドナルド様からいただくドリンク券も、企業からの応援メッセージとして受け取られています。企業の名前やブランドに触れることにより、生きづらさを抱えた少女たちに、社会にあなたのことを気にかけている人がいると、エールを送ることができます。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、世界中が大きく変わろうとしている中で、若草プラットフォームも、将来は企業のみならず、教育、医療、就労、住宅など、さまざまな機関とつながることにより、少女たちのさらなるエンパワメントにつなげていきたいと思っています。今日ご参加の皆さまも、ぜひ、このシンポジウムで感じたこと、気づいたことに目を向け、学校で、職場で、アクションを起こしてください。

ファーストリテイリング・グループと若草プロジェクトの出会い

シェルバ・英子

株式会社ファーストリテイリング コーポレート広報部ソーシャルコミュニケーションチームリーダー

私どもファーストリテイリング・グループと若草プロジェクトさんとの出会いについて、それから、今の社内での従業員の变化や社外からのコメントなどについて簡単にお話ししたいと思います。



ファーストリテイリング・グループでは、「日本のみならず各国であらゆる人々が平等に生きられる社会へ」という理念のもと、女性のエンパワメントの取り組みとして、私たちは服のビジネスをしているので、服のチカラを通じてさまざまなサポートを実施しております。今でこそ「女性のエンパワメント」という、しっかりした方針をもって進めることができていますが、実はこのきっかけをつくっていただいたのが、若草さんとの出会いです。

若草プロジェクトさんが設立の準備をされているとき、私たちには女性支援ということがまだまだピンと来ていませんでした。実際に少女たちが置かれている状況を村木さんや朝日エルの岡山会長にうかがっていくうちに、私たちは海外の難民に服を届ける活動をかなり幅広く実施していたのですが、日本国内においても、着の身着のままでも本当に困っていらっしゃる少女たちがいらっしゃるという事実を知りました。そして、この事実を知った以上は企業として何かできることを考えていかなければいけないのではないかと、いろいろな取り組みをスタートさせることになりました。

現在、国際ガールズデー月間に、TsunA がーるを通じて全国の 84 の施設の女性の方々に、吸水ショーツや、ユニクロ、GU、セオリーというグループブランドの衣料品の支援をさせていただいています。2018 年に活動を実施して以来、累計で 5 万着以上の寄贈をさせていただいています。

店頭でもスタイリングイベントということで、スタッフが実際に一人一人に着こなしなどのアドバイスをする体験型のプログラムも実施しています。これは従業員たちにとってもすごく意義深い体験になっておりまして、自立援助ホームについても事前に調べてイベントに臨むなど、社内的にも女性支援に対する意識が高まっているなど実感しています。

やはり女性にとってファッションはすごく大事なものですし、自分を表現するうえでも大事なツールだと思っています。ファッションブランドとして、グループ全体で取り組めるというのは、非常にいい取り組みだと社内的に評価をしています。

グループ会社の中でも、セオリーは 2015 年から取り組みを開始しており、今グループ全体でやっているスタイリングイベントの枠組みをつくったのがセオリーでした。GU では、マイレージプログラムの寄付先の一つとして若草プロジェクトさんを選べるようになっており、非常に広がりのある取り組みになっています。海外の拠点でも同じような形で女性の支援、女性のエンパワメントが社内に広がっているという状況です。

民間の立場で何かできるかなと考えていらっしゃる方は、ぜひ我々の事例を参考にいただければと思います。

それは社会を変える“ちから”になる

岡山慶子 株式会社朝日エル 会長



現在、若草プロジェクトには、持続可能な社会をつくることに賛同される 25 社の企業が参画しています。若草プロジェクトの代表よびかけ人である村木厚子さん、ファーストリテイリング・グループのシェルバさん、私との出会いがあり、このような企業連携の取り組みがスタートしました。

私は 2000 年頃にアメリカウェストミシガン州で持続可能な社会をつくることを共通の目的として、行政と企業と教育機関、そして市民全体が一体となって取り組んでいることに出会いました。「なぜ連携がスムーズにいくのか」、との質問に企業の人から、「持続可能な社会をつくること、それは正しいことだから、人を愛する行動だから、企業は市民の一員だから」との返答がありました。

また、誰でも、つらい時、弱っている時、困っている時があります。そこに眼を凝らすと、人が生きるため、生活するために大切なものは何かが見えてきます。それを知ることは企業にとっても宝物であり、企業の存在意義を教えてください。そして、それは社会を変える“ちから”となるでしょう。

第2部 あなたが背負ったものはなにか。背負わなくてよいものはなにか。

上野千鶴子 社会学者



◎ 背負ったものは歴史

あなたが背負ったものは歴史です。生まれる時代、場所、親は選べません。

でも、戦時中に生まれなくてよかった。戦時中、男は20歳で死ぬつもりで生きていました。戦前に生まれていたら、女の子は売り買いされました。それから、空襲から逃げまどったりしなくてはならなかった。今の日本は平和ですが、でも、今の時代、この日本に生まれることが幸せかどうかはわかりません。

そして、このシンポジウムのテーマは「少女たちは世界を変える」です。できるわけない、そんなもん。これはオッサンの妄想です。

なぜかという、少女は最も無力な存在です。最も無力な存在が一発逆転で世界を変えることができるというのはオッサンの妄想で、そんな妄想が描かれたのが、「セーラームーン」や「風の谷のナウシカ」です。

少女というのは無垢と純潔のシンボルで、無垢だということは無知で無力であるということです。

私は30年以上前に『女は世界を救えるか』という本を書きました。

答えはNOです。男が壊した社会を、女に後始末させるなよ、とあたりまえのことを言いました。

だから、「少女たちは世界を変える」はファンタジーだと思ってください。

少女が見ている世界は狭いです。背負ったものは歴史ですが、少女が生まれ落ちるのは家族、あとはせいぜい学校で、家庭と学校から排除されたら居場所がない。今はバイトが禁止され、低年齢バイトでは付け込まれることに決まっていますから、本当に逃げ場がない。

親とか身の回りしか見なければ、こうすれば生きていけるという大人のモデルが少ないですね。それに、大人にいろんなことを期待したり、言ってみたりした結果、散々な目に遭って、不信感を抱いている。私はそんな例を本当にたくさん聞かされました。そうすると、この子たちは孤立するしかありません。

無垢だということは無知なので、お父さんに性虐待に遭っていた女の子は、「お父さんはこういうことをするものだと思ってた」と言います。だって、他の親を知らないし、他の子に言ったりしたら、どんな反応をされるか怖い。おまけに加害者は必ず「絶対他の人に言うんじゃないよ、家庭が壊れるからね」と言います。それから、DVの親を見て、夫婦って、大人の男女って、こういうことをするものだと思って育つ。他の家族のところに自由に出入りしてそれを見る経験がどんどんなくなってきていて、結局、私だけがこんな目に遭って、これがずっと続くのが女の人生で、虐待されても、きっと私が悪いんだと思ってきた。

それが、50 年前、ウーマンリブというものが生まれたときに、標語が生まれました。

「個人的なことは、政治的なことである」

やっとの思いで口にしてみたら、あるある。あなたもそうだったの、と。

「#MeToo」って、今頃言うなよ、です。半世紀前の日本で、「あなたもそうだったの？じゃあ私だけじゃなかった。私のせいじゃなかったんだね」。これがウーマンリブ、フェミニズムというものでした。

少女の困難は、このところ非常に過酷になっています。それは、大人になるまでの期間が著しく延長したからです。昔は 7 歳から奉公に出てもよかった。中学卒から就職することもありました。でも、今、高校を出ないと人並みだと思われない。高校中退なんかしたら、もう本当にはずれ者になってしまう。同じ年齢の半分が大学に行っているから、大学に行かないと、割の悪い人生が待っていることになる。

一人前の大人になる前に身につけないといけないものが増えすぎた。日本語ができるだけでも上等なのに。だって漢字と平仮名とカタカナの 3 種類を覚えて使いこなさないといけないんですよ。世界で最も難しい言語を使いこなしているあなたはなんでもできる、と言いたいぐらいなのに、そのうえ英語もできなければならない。情報リテラシーを身につけなければならない。そのために教育を受ける期間が著しく延びていて、国がお金を出さないばかりに、親の経済的負担に依存しているというのが、今の日本です。

少女とはどういうものか、『少女民俗学』という本を書いた大塚英志さんが、面白い定義をしてくれました。すでに十分に成熟しているのに、「使用を禁止された性的身体を持ち主」。わかりやすいですね。

だって、初潮が来た時には子どもを産めるからだになっているんです。初潮があって、成女式があって、セックスが始まり、婚姻がある。私の明治生まれの祖母は 16 歳で結婚して 1 児を産み、19 歳までに離婚していました。そういう時代がありました。だから、からだは性的に成熟しているのに、社会的には自立できない期間が延々と伸びてしまったわけです。その中で JK（女子高生）と呼ばれる人たちの価値が上がりました。価値を上げたのは、オッサンです。何に価値を与えたかと言うと、禁止された身体を自分の思うようにできることに価値を与えたのです。

風俗業界は「年功逆序列」と言われます。新人が最高で、それから下がる一方。だから、「自分の値段がいちばん高いときに売って何が悪い」と女の子たちが思うのも無理はなく、それを女の子たちに教えたのはオッサンたちの性の市場です。

◎ 家族という深い闇

そういうわけで、女の子たちは家族に閉じ込められているわけですが、家族の歴史をちょっと振り返ってみましょう。あなたたちが背負った家族とはいったいどういうものだったのか、考えてみましょう。

家族の闇は本当に深くなりました。それは家族が孤立したからです。そして、家族の恥は表に出さない。沈黙と隠蔽です。

家族はいつから今のようになったのかというと、大昔からこうではないんです。

私たちはこういう家族のことを「近代家族」と言っています。夫婦と子どもから成る家族（夫がいない家族

もずいぶん増えたと思いますが)の中で、夫が稼ぎ、妻は家事をする。この体制ができた歴史は浅く、日本では戦後になってからで、こんなものは伝統でもなんでもありません。

なぜか考えてください。日本の自営業の大半は農家ですが、農家の妻が夫に弁当を持たせて、赤ん坊を抱いて、門口で「お父さん行ってらっしゃい」なんて言うと思いますか。農家に専業主婦なんていません。自営業の家庭は「家族総労働団」、働ける人間は全員働く。赤ん坊がいたら腰に結わえ付けてでも田んぼに連れていか、さもないと、働けないジイさんバアさんが家で面倒をみる。これが日本の家族でした。

だから、今のような家族になったのは、ものすごく歴史が浅いんですね。

それがどうなったかというと、今は家族を養えるオッサンなんかいなくなって、妻は稼ぎに出ないといけない。はした金で、ですよ。仕事と家事の両方をやらないといけない。二重負担です。

夫が稼いでいると、必殺アッパーカットが出てきます。「誰のおかげで食わせてもらえていると思っているんだ」。「誰のおかげで外に働きに出られると思っているんだ」と言い返せばいいのですが、でも、やっぱり金の力は権力だから、女性の交渉力は圧倒的に弱くなります。

その中で皆さん方は生まれ育ってきたと思うのですが、基本的に、家族の中に公権力は立ち入らないということになっています。そこで夫婦げんかがあるのが、障害児を抱えて呻吟していようが、ヤングケアラーがいようが、家族の問題は家族で解決しなさい、公権力は立ち入らないというのが基本です。これを「公私の分離原則」と言って、「プライバシーを守る」というのですが、ちょっと待てよ、プライバシーって何だったかという、そこで力の強いやつが好き放題やっても罪に問われないという空間がプライバシーだということを暴いたのが、ジェンダー研究です。これを覚えておいてください。

フェミニストの法学者、フランシス・オルセンという人がカッコイイことを言っています。

“No intervention is an intervention.”

不介入とは介入の一種である。つまり、家族の中で行われたことは、何をやっても犯罪化されない。父親が娘に手を出そうが、夫が妻を殴ろうが、犯罪化されない。道路の上で誰かを殴れば、犯罪になるのに、家族に関してはそういうことが今日に至るまで続いてきたということです。

その中で、子どもはいちばん弱者ですから、親は子どもに好き勝手ができる。教育虐待というものもありますよね。「あなたのために」という言葉のもとに、親の横暴が続いてきたというのが、近代家族というものです。

最近、「親ガチャ」ということが言われています。親は選べない。子どもにとって、本当にクジに当たるか外れるかみたいなもんだと。子どもは親から贈与をもらうのですが、贈与にはプラスの贈りものとマイナスの贈りものがあります。プラスの贈与には豊かさとか教育機会とかがあるかもしれませんが、こんなものならもらわなければよかったというマイナスの贈与もある。虐待とか、暴力とか、貧困などです。

家族は、ずっと、「愛の神話」「愛の共同体」という名前で蓋をされてきました。実は臭いものに蓋をしてきたので、蓋を外してみると、臭気が漂ってきたわけです。家族という密室の蓋を開けると、家族の闇がどんな

に深かったかということがわかってきた。それを私たちフェミニストが指摘したばかりに、フェミニストは「家族破壊者」の汚名を受けました。だけど、私たちはどう言ったかというと、「とんでもない、家族はとつくに壊れていた。私たちはそれを白日の下にさらしただけだ」と。それが実態です。

にもかかわらず、今でも家族の壁は非常に厚いです。昔に比べれば、家族は脆く、小さく、本当に壊れやすくなったのに、家族の中のことは外に出さない。

◎近代家族は最初から重荷を積み過ぎた

ではDVが増えたか、虐待が増えたかという、統計上の件数は増えています。これは、申告件数のデータです。申告件数というのは、誰かが申告したから増えているので、「我慢しない人が増えた」というデータであって、実際に日本の男が昔に比べて暴力的になったかどうかは、統計がないのでわかりません。

が、推測できることはあります。たとえばあばら骨を折るほどのDVを妻が受けるということが戦前にあったか。昔はプライバシーというものがもっとスカスカでした。例えば結婚には仲人さんがいました。「いい人だって聞いて嫁いだけど、こんなひどい目にあった。どうしてくれる」とクレームを持っていく先があったのです。だけど、今はみんな恋愛結婚ですから、自分で相手を選ぶでしょう。親に押し付けられるわけじゃない。自分が選んだ男に殴る蹴るされても文句の持って行き場がないわけです。自己責任と言われる。私が至らぬせい、自分の恥だと思われるから、人に言えない、言わないというふうになっていく。

虐待も、本当に死にそうぐらい、子どもを飢えさせたり、大やけどをさせたりしたら、長屋に暮らしていれば、必ず第三者の介入があります。「あんた何やってんだよ、この子に」と。そういう第三者がいなくなっちゃったから、通報をして、警察という公権力が介入しなければいけないような世の中になってしまうほど、家族の孤立が深まった。

だから、これは推論ですけども、DVと虐待は、単に申告件数が増えただけではなくて、おそらく実際にも増えたであろうと思います。なぜなら抑止する力が社会になくなってしまったからということは、推測することができます。

ということを論じた本が『家族、積みすぎた方舟—ポスト平等主義のフェミニズム法理論』（マーサ・A・ファインマン）です。

なんでこんなことになってしまったのかというと、家族の重荷が重すぎるからです。

家族は危機だ、危機だ、と言われます。保守系のオッサンは、「家族が危機だ、家族を守れ」というのが大好きですが、家族が危機になったのは、昨日や今日のことでありません。近代家族がスタートした時から、つまり、弱い者＝子どもや年寄りの世話を全部ワンオペで女がやるという仕組みを作ってきたその時点で、座礁を運命づけられていた。私がこの本のタイトルを「積み過ぎた方舟」としたのは、最初から重荷を背負いすぎていたから、早晚難破するのは当然だと言ったのがこの本だからです。ちゃんとこういう理論書があります。理論と知識は力になりますから、勉強してくださればと思います。

◎ 行き場のない女性たち

結果として、家族はけっして癒しや憩いの場だけではなく、危険な場所にもなった。家族の中でいちばん弱い立場の人たちにとって、家族ということ自体が緊張を強いられる危険な場所となったという状況が増えました。

小さな子どもたちは本当に死にます。死にそうになって児相に連れて行かれる子どもたちもいます。今、児相にいる子どもたちの大半は親を失った子どもではなく、親が揃っているけれど親元にいるほうが危険な子どもたちです。

若い人たちは家出する気力があれば家出しますが、家出した先で食えない。生きていけない。「今晚泊めてください」というと、「はい、泊めてあげますよ」という救いの手が来る。これを「神待ち」というのだそうですが、この「神」とはチープな神様で、下心があります。それで、「私の肉体には市場価値があるんだ」ということを覚えた女の子たちが、彼女たちを待ち受けている性の市場に入っていくと、風俗という業界があって、そこは「最後の社会保障」とすら言われるようになりました。そして同年代の男の子たちが、女の子たちをどう見るかという、「いいよな、女は売るものがある」というわけです。売るものがあるのはそんなにいいことなのか、どうなのか。

こういうところから逃げ出すために、家から出たい一心で結婚する。やがて彼女たちを待ち受けているのは、夫の横暴、DV です。それで婦人相談所やシェルターに行くんですが、被害者がなぜ逃げなきゃいけないのか。加害者を隔離するのが当然なのに、今は被害者が逃げ隠れしないとけない。そういう社会です。そして、もっと先、中高年のオバサンになるとしましょう。私の指導学生の一人が、「シングルマザーに老後展望はあるか」という学位論文を書いて博士号をとりました。彼女の答えは「ない」です。風俗に行き場を失った女たちを待っている、たったひとつの業界は、他人様のお下の世話をする介護業界。そこで倒れるまで働くという選択肢のみです。ひとつしかない、選べないものを、選択肢とは呼べません。こういう行き場のない女性たちが若年から高年まで続いているのが今の状況です。

◎ 女性の貧困をつくったのは政治

この中で、政府は都合よく女に働いてもらいたいと思っています。日本の働ける女の 10 人に 7 人が、あれよあれよとアメリカとヨーロッパを抜いて働いています。そのうちの 10 人に 6 人が非正規労働をしています。非正規労働だとフルタイムで働いても、年収は 200 万円に達しません。年収 200 万円で食えますか？ ましてシングルマザーなら扶養家族もいるんですよ。

非正規の何が問題か。同じ働きをしているのに、正規の人と比べたら、賃金が 3 分の 2 から 2 分の 1 まで格差がある。もっと露骨に言いましょう。賃金格差をつけて低賃金に収めるために、非正規雇用という労働市場を作り出したのが日本の社会です。

なぜかという、父親ひとりの稼ぎではもう食えないからです。専業主婦は完全に少数派になりました。日

本の男の賃金が上がらないからです。

これやってきたのは政治です。1975 年に「国連女性の 10 年」が始まってからこういうことをやってきました。1985 年、国連女性差別撤廃条約を批准した年に雇用機会均等法をつくったけれども、同じ年に労働者派遣事業法をつくりました。今、派遣は全職種可能です。1 日派遣も可能です。それをつくってきたのが政治です。

今から思えば、1985 年は「女性の分断元年」「女性の貧困元年」でした。「女女格差元年」と呼ぶ人もいます。

私の『女たちのサバイバル作戦』は、雇用機会均等法以来、働き方の歴史を振り返れば、経営者側にやられっぱなしだったということを、痛恨の思いと悔し涙で書いた本です。読んでみてください。

◎ コロナ禍で増幅したシングルマザーの困窮

そして、コロナ禍が起きました。非常時というのは、何か突然、見たことも聞いたこともないことが起きるわけではなく、もともとあった矛盾が拡大増幅するものです。しかもそれは、社会集団の中の最も脆弱なところを直撃します。

産業でいうと、小売業、サービス業、宿泊業など、オンライン化できないような産業に女性の非正規労働者が集中しています。こういう業種は女性の非正規労働者に依存してきたことがはっきりわかります。それが、コロナ禍で直撃されたわけです。

NPO 法人しんぐるまざあず・ふぉーらむが、2020 年 8 月、全国一律一斉休校要請で、家にいる子どもの世話を誰がするのか、私が稼ぎに出なかったら誰が家計を維持するのか、という立場に立たされた女性たちの大規模な調査を 1 か月かけてやりました。こういう調査はものすごく大事です。なぜかという、非常時にどこで何が起きているかということを、記録して記憶しておくことが重要だからです。

それで出てきたのは、コロナ禍の影響で働いて得る収入がゼロになった非正規の女性が 6 人に 1 人という結果です。統計データも大事ですが、生の声も大事です。切々とした声が寄せられました。

「自主休業したら、自己都合なのでなんの保証もない」とか、「給食がなくなって月に食費が 1 万増えた」「子どもには日 2 食で我慢してもらい、自分は 2 日に一食。子ども私も体重が激減した」。

今の日本に飢餓ラインに達するような貧困があるんです。

これが去年の夏です。それから 1 年以上経ちました。この方たちは今どうしておられるのだろうかと思います。

これだけの貧困が目の前に待ち受けていても、離婚は増えています。私は離婚できる社会のほうが、離婚できない社会よりずっとましだと思っています。今の若い女たち、とくに 30 代の離婚率が上がっています。今、子どもがいることと、子どもが小さいことは離婚の抑止力にならなくなりました。昔のお母さんたちは「娘を家から嫁がせるまではじっと我慢」とか言っていたわけですが、今の女の人はい我慢しない。たとえ経済的不安が目の前にあったとしても、我慢しなくなった女たちが登場したことはすばらしいことだと思っています。にもかかわらず、離婚後の女をこれだけの苦難が待ち構えているというのは、元の夫が責任逃れをしやすい

社会を日本がつくっているからです。

この社会をつくったのは人災です。政治がつくりました。こういう変化は天災のように起きるわけではありません。政治と制度がつくったわけです。

女は男に養ってもらえばいいだろう。できるだけ条件のいい男をつかまえばいいだろう。でも、一部の女を使ってみたら、能力があることがよくわかったから、じゃあ使える女は男並みに使い倒そう。これが雇用機会均等法です。

そうでもない大多数の女たちは、二流の労働力におとしめて、食えない賃金でいいだろう。父ちゃんがいるから。ちゃんとセーフティネットがあるからいいだろう。これを「家庭補助労働力」と言います。

そういうふうにして、正規と非正規の二重労働市場を 30 年かけてつくってきたのが日本社会です。

ただし、想定外のことが起きました。この非正規労働市場に、結婚してない女たち、結婚からはみだした女たち、自分の世帯を自分で維持しなければならない女たちと男たちが入ってきた。これが番狂わせでした。

◎「我慢しない娘たち」という福音

こんな世の中に誰がした。私は若い時、そう思って上を見たら、まっ黒けのオッサンたちが見えたので、「オヤジ、ウザい」と思って石を投げました。本物の石です。

でも、今、私は高齢者です。この年齢になってみて、若い人たちから、「こんな世の中に誰がした」と詰め寄られたら、「ごめんなさい」と謝るしかない。本当に申し訳ない思いです。

女がいろんなことを呑み込んできた。被害者であり続けた。最近の #MeToo の動きのなかでようやく、「セクハラも痴漢も DV も、こんなことは私の世代で終わりにしたい」「次の世代に受け渡さないようにしたい」と女の人たちが言い出した。

私は社会の変化は若い人からだけ起きるとは思っていない。年長の女たちが「今まで自分たちが被害者であり続けた、自分たちが今まで呑み込んできたことが、次の世代に被害者を産むことになってしまった」と言い出すようになりました。私は、これは大きな変化だと思いました。女が被害者でい続けることは、次の誰かにとっての加害者になることだからです。

私がいいなと思うのは、「こんなバカげたことを私がガマンする理由は何もない」というあたりまえの意識をもった若い女の子たちが出てきたことです。ガマンしない娘たちがこれだけ大量に登場したのは日本史上初だと思いますが、それを育てたのはお母さんたちの恨みつらみですからね。だから、世代をまたがった女性の変化だと思います。

誰に責任があるかというと、人災ですから、物事を決める立場にいたオッサンたちに責任があります。だから、この世の中を変える責任は、大人にあって、若者にはありません。

私たちはこの半世紀ぐらい、政・財・官界のオヤジたちにやられっぱなしでした。頑張らなかつたわけじゃない。努力しなかつたわけじゃない。だけど、非力でした。こんな世の中しか手渡すことができなくてごめんなさいと、この壇上で言わなければいけない自分が本当に悲しいです。ここにいらっしゃる年長の女の方は、その間

有権者でいらしたわけだから、女性にも半分の責任があります。

◎子どもは親を背負わなくていい

では、背負わなくていいものはなにか。

こんな世の中に皆さん方を送り出す私たちは本当に情けないですが、あなた方に最初にのしかかってくる重荷は親だと思います。親は子どもに責任があるけれど、子どもは親に責任がありません。頼んで生まれたわけでもなし。大人は自分の人生に責任があります。人間を 40 年も 50 年もやってきたら、自分の人生に責任があります。親業はいつか必ず卒業するものです。私は親にはなりませんでした。教師をやっていたから、親と教師というものは、子どもと学生から「今まで育ててくれてありがとう、明日からあなたは要りません」と言ってもらうためにいると思っています。もし、そう言ってもらえないとしたら、その子育ては失敗したと言うべきです。その時に、親も子どもも親子関係から卒業していく役割があります。

その中で、親だけが大人じゃない、大人の中にもいろんな大人がいることを学んでいただきたい。大人の役割というのは、選択肢が非常に狭い子どもたちに対して、あなたの知らない選択肢が世の中にはこんなにあるよということを教えてあげる、それが大人の責任だと思います。

◎「助けて」と言えるチカラ

私は、東大入学式でのスピーチでバズりました。急に知名度が上がった。それまではオバサンにしか知られていなかったのに。

いろんな人がいろんなところを引用した中で、いちばん引用が多かったのが、「恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください」でした。たくさんの方が、ははーん、これってノブレス・オブリージュ、高貴な人の義務ですね、余裕のある人が余裕のない人に手を差し伸べることでですねと理解しました。

ちょっと待ってよ、私はその直後にもう 1 行付け加えました。「そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください」。

ここまでまとめて引用してくれる人がめったにいないんです。

あのスピーチは、東大の新入生に向かって言いました。東大入学者は受験戦争の勝者だと、皆さん方は思われますか。私は彼らを受け取ってきてわかったことがあります。勝者は不安の塊です。なぜなら、勝者はいつまでも勝者でいることはけっしてできないからです。昨日の勝者が今日の敗者になっていく無残な現実を、皆さんはオリンピックで目の前になさったばかりです。

私が「フェミニズムとは弱者が弱者のままで尊重されることを社会に求める思想だ」と言ったら、「へえ～そんなフェミニズムの定義って初めて聞いた」と、とくに男たちが何人も言いました。オッサンたちのフェミニズムの理

解は、「男女平等、あ、そう、キミたちボくらみたいになりたいんだね。じゃあ女捨ててかかってこい」。これが機会均等法です。私たちは別に男のようにになりたいわけじゃない。男のようになるとは、勝者、支配者、差別者になるということです。

私たちは、男にも女にも被害者にもなってほしくないし、加害者にも、傍観者にもなってほしくない。皆さん方には本当にどんなところでも生き延びていける知恵を身につけてもらいたい。

私は東大生にもそういう教育をしてきました。東大ブランドなんかこれっぽっちも有効性を持たないようなところに行っても、たとえ難民になっても、生き延びる知恵を身につけてもらいたい。生き延びるための能力やスキルは、ないよりはあったほうがいいかもしれないけれど、そんなものはない人でも生きていける。なぜかという、もうひとつ、素晴らしいスキルがあります。能力やスキルのある人をゲットする能力です。私はそれで生きてきました。私は言葉の通じない外国にたくさん行きました。言葉が通じないって、本当に無力な赤ん坊のようになる状態です。そこで生きていくのはたったひとつ。「助けて」と言うことです。「助けて」と言うチカラ、これもチカラです。

◎少しでも信頼できる依存先をたくさん持つ！

私は、人に迷惑をかけないようにするという教育をするくらいだったら、上手に迷惑をかけるスキルを身につける教育をしたほうがずっといいのと思うんです。でも、弱さというのは、それを安全に言える場所でないに出てこないですよ。

社会的弱者の最たるものは身体障害者です。他人に頼らないと、ご飯も食べられない。ウンコ、オシッコもできない。そういう最弱者の人たちが当事者研究を始めました。その当事者研究が生んだ経験知があります。

最近、天畠大輔という重度の障害を持った男性が『〈弱さ〉を〈強み〉に——突然複数の障がいをもったボクにできること』という本を出しました。私は帯に推薦文を書いたのですが、他人の力を借りなければまったく「動けないボクが社会を動かした」という例です。

この当事者研究が生み出した経験知を紹介して私の話を終わります。

「自立とは依存先の分散である」。

これは、熊谷晋一郎という東京大学医学部初の脳性麻痺の医学生という言葉です。

上手いこと言うねえ。大黒柱ひとつに依存していたら、大黒柱がこけたら皆こける。熊谷さんは、お母さんに依存していたときには「お母さんがいなくなると僕はもう終わり」だと思っていました。お母さんはお母さんで「私がいないとこの子は」と思って、こういうのはやがて、「いっそひとりで、この子と一緒に」となりがちです。だけど、大黒柱がなくても、細い筋交いがいっぱいあったら、その細い筋交いが数本なくなっても大丈夫と思える。だから、筋交いをたくさんもったらいいと思います。

たくさん大人たちの中には、ちょっといい人、ちょっと悪い人、たくさんいい人、たくさん悪い人がいます。いろんな大人に接触していったら、この人は信頼できると思える人たちを筋交いにする。絶対的な信頼ができなくても、ほんの少しの信頼でかまいません。人間はできることしかしません。自分の人生を犠牲にしてまで他

人を助けてくれるような中村哲さんみたいな人はめったにいません。

こういうことをやってきた支援者の一人、当事者研究の産みの親である向谷地生良という人が、統合失調症の患者さんを相手に、何度も何度も裏切られ、何度も何度も期待外れに遭い、「とりあえず信頼する」「やけっぱちで信頼する」と信頼を育むということをやっています。

これで私の話を終わりますが、『女の子はどう生きるか』（岩波ジュニア選書）という本を書いたので、読んでください。男の子にも読んでもらいたい。

私たちはどんな社会を求めるかというと、「女がひとりでも安心して子を産み、育てられる社会を」と 50 年前にも言いました。でも、それはまだ実現されていません。安心してシングルマザーになれる社会は、安心して弱者になれる社会、要介護にならんとこうと思わなくても、要介護になっても安心できる社会です。

最近、いちばん嫌いな言葉は「認知症予防」。予防ができるんやったら、認知症になった人に自己責任やと言unkaiな。誰が好きで認知症になりますかいな。認知症になっても安心して世話してもらえる社会、障害をもっても、「津久井やまゆり園」のように殺されない社会。そのために、女性にチカラを持ってもらいたいと思っています。

「権利の上に眠るな」（市川房枝）

明日の衆議院選挙で、権利をちゃんと行使して、あなたの責任を果たしてください。



第2部 あなたが背負ったものはなにか。背負わなくてよいものはなにか。

◆上野千鶴子さんに聞いてみよう！～若者たちとのトークタイム

コーディネーター：大谷恭子 若草プロジェクト代表理事

◎男女の賃金格差がなくなるのはなぜ？

和歌山の高校生からの質問

「男女の賃金格差はどうしてなくなるんですか？」



上野：賃金を決めるのはオッサンたちですから、人災です。オッサンというのは、男女を問わず、面の皮と財布の厚い人のことを言います。そういう人たちを意思決定の場に送り出した有権者にも責任があります。

◎JK ビジネスの取り締まりが甘いのはなぜ？

京都の高校生からのビデオレポートと質問

「世界の発展途上国の児童労働問題はユニセフなどの機関が取り組んでいて、多くの人が知っている。でも、発展途上国ではない日本でも、JK ビジネスとか児童労働の問題があり、児童労働問題はなくなっていないんだとわかりました。少女たちが性風俗の仕事につくことに先生はどう思っていますか？なぜ日本は取り締まりが甘いのですか？」

上野：14 歳以下の労働を禁止したのは政治ですから、労働を禁止した子どもたちを養う責任が国にあります。ですから、すべての子どもたちが、食べていける児童給付を、子ども手当みたいな“はした金”ではなく、月に 8 万円くらいもらえたとしたら、年金がついているようなものだから、家を出て他のオトナに、持参金付きで「オバチャン育てて」と言うこともできるかもしれません。そういう子どもが 3 人くらい来れば、合計 24 万円で子どもを育てながらちゃんと食っていける人も出てくるかもしれない。

国が 14 歳以下の労働を禁止するのであれば、14 歳まで生活を保障しろよと要求してもいいはず。風俗業は 18 歳以上でないと法的に認められません。それ以下の年齢は、完全に闇のマーケットです。あってはならないことなのに、現実には市場があります。ということは、政治が見逃しているということです。男たちに甘い、男が責任逃れをしやすい制度や政策、政治がこの国にずっと長い間、続いてきたからです。

◎援助交際や風俗で稼ぐのは悪いことですか？

性搾取の当事者の K さんの声

「父親が中学生の頃に亡くなって母子家庭で女の子 3 人育ててもらい、子どもながらに家庭を支えなければと思って夜のお仕事に踏み込んだ。掛け持ちで風俗の仕事も始めたけれど、お店側に給料の半分以上を持っていかれて、からだを張っているのは女の子なのに、もう少し割に合った給料や待遇とか、風俗をやらなくてもいい環境づくりをする世の中であってほしい」

援助交際をしていた 19 歳からの質問

「援助交際や風俗で稼ぐことは悪いことですか。誰も傷つけてないし、見つければ補導されるから逃げていたけど、悪いことだったのか、まだよくわかりません」

会場の大学 3 年生からの質問

「高校時代からの友人が去年からガールズバーで働き始めた。性格が変わって、男の人からいろいろされるらしいのに、やめない。友人として何か言ってあげたい気持ちはあるけど、どう言っているのか、どう接したらいいのか」

風俗で働いている 19 歳からの質問

「風俗で働いたあと、手を何度も洗ったり、シャワーを浴びたりしちゃう。やっぱりこの仕事って自分を汚しているのかな。汚れたからだになったのかな」

上野：K さんの話を聞いて思ったのは、適正価格で業者のピンハネ率がフェアだったら、満足するのか。そういう条件闘争の話なのかと。それから、K さんは家にお金を入れているのか。親は娘がどうやって稼いだお金かわかって受け取っているのだろうか。わかっていても知らないふりをしているのだろうか。

今、風俗は価格崩壊が起きています。NHK の「路地裏に立つ女たち」という番組をご覧になりましたか？もし業者にピンハネされるのがイヤだったら、誰にも搾取されないフリーランスをやればいいんですよ。でも今、フリーランスでやってる人が客と交渉するときの価格は、5 千円から 2 万円だそうです。そんなもので自分のからだの一番敏感な部分を他人に自由にさせるって、やりたいですか。たしかに他のバイトよりは女の子に割のいいバイトで、男の子から「キミらしいよな、売るもんがあるって」なんて言われそうですが、そのへんのバイトの時給よりはいいかもしれないけれど、高いたってそんなもんです。男はなぜそれにお金を払うかというと、「本当はやっちゃいけないことを俺はやってるんだよね」という無責任さの代償を払っているんだと思います。だから、公然とは売買できない闇の市場になっているんです。

私は、「セックスワークもワークだ。自分のからだは自分の所有物だから、自分の所有物を自由に扱って何が悪い」という自己決定論に、非常に違和感を持っています。

セックスワークって何かというと、自分の身体のいちばん敏感な部分を他人の自由に委ねるとい、はっきり言って不愉快な労働です。不愉快な労働をやらずにすめばやらない方がいい。それから、性感染症や暴力、密室での虐待や SM とか、リスクが凄く大きい。怖い思いをして逃げてきたという女の子がたくさんいます。

「神待ち」のチープな神様たちも含めて、男の下心というのは、女の子を金で自由にしたい、自分の性欲の道具にしたいというもの。女の子は、卑劣で傲慢な、男のいちばんイヤな面を見るわけです。そういう人が、相手にしたあなたをリスペクトしてくれるとはとうてい思えない。リスペクトせずにすむから金を払っているわけで、自分をリスペクトしてくれない相手の対象となった自分を本人がリスペクトできなくなっていくます。

「汚れた」と思うのは、日本における汚れの観念から来ていると説明しなくても、自分が相手からリスペクトされない扱いをされたことに対する傷なんだと思います。

私は、こういうことは、できればやってほしくない。ほかの選択肢があるなら、やらずにいてほしい。

じゃあそういうことをやってる友だちにはどうすればいいのと言うと、「私はあなたにそうしてほしくない」と正直な気持ちを言ってほしいと思います。

◎ 自分のからだを好きに使ってみてわかったこと

上野：今日は実はスペシャルプレゼントがあって、夜職のベテランで元 AV 女優の経歴を持つライターの鈴木涼美さんと私は、1 年かけて往復書簡をして、かなり突っ込んだ話をしました。そして、私は大谷さんからこの場に引きずり出されることがわかっていたので、「こういう質問が来そうなんだけど、あなたならなんて答える？」と事前に訊ねました。そしたら、優しい涼美ちゃんは返事をくれました。今から読み上げますね。

「かつて自分のからだを自分で使って何が悪いと思っていた身として、その時にはわからなかったこと、そして、自分のからだを好きに使ってみた結果、少しわかったことをお答えします。

売春や夜職は次の 3 つの点で自分にとってマイナスがある。

まず第一に、現在または将来、当事者に嘘をつかせる。「私、こんなことやってたのよ」と堂々と家族や友人や恋人や将来の雇い主に言えるか。隠さなきゃいけない過去になってしまう。隠さなきゃいけない過去になった時点で、自分の人生の中に嘘を抱え込むことになってしまう。その間、経歴に空白ができます。

2 つ目には、自分の価値を上げることが不可能。入ったときに一番値段が高いのだから、どんどん下がっていく一方で、将来のキャリアに展望が持てない。しかも賞味期限がつく」

ついでに言っておきますと、なぜ性的商品市場で若さと経験値の低さが最も価値を持つか。知りたいでしょ。言わなくてもわかる？ 理由はものすごく簡単です。男の顧客たちが自分に自信がないからです。他人と比較されるのが怖い。だから、ベテランを相手にしたくない。経験値の低い女を自分の自由にしたいというニー

ズが、客の側にあるからです。

「3つ目は、売っている最中よりも残りの人生のほうが長い。その結果、AV女優やセックスワーカーをやめることはできても、元AV女優や元セックスワーカーという称号は、生涯消えない。その時期が長い。そのために支払わなければならないつけが大きいAV女優や風俗嬢はやめられても元AV女優や元風俗嬢はやめられないというのは、AVを引退して15年経った私が強く思うことです」

◎ 気持ちのいいセックスをしてください

上野：もうひとつ彼女が付け加えてくれたことがあります。私とのやりとりを経て、彼女が学んだことは、「男性への根本的な信頼やリスペクトを失ってしまう。男との関係がうまくいなくなる」ことだと。

人間関係というのは、恋愛関係でも、リスペクトし合える同士で選び合ってもらいたいと思います。

私はセックスワークをしている女性たちに、「気持ちいいセックスしてる？」と聞くんです。たぶん気持ち悪いと思います。不愉快だと思います。場合によっては苦痛さえ伴うと思います。だから、金でももらわないとやってられないんですよ。

じゃあ気持ちよさって何か。私は、快楽というのは、自然が動物としての人間に対して生殖行為に与えたごほうびみたいなものだと思います。だから、快楽のために、自分のからだをどのようにお使いになるのも自由だと思います。でも、お金でももらわないとやってられないほど不愉快で苦痛の多い行為だったら、やめた方がいい。おそらく男がお金を払うのも、相手の女性にとってはそれがちっとも気持ちのいい行為ではないことをちゃんとわかってるからだろうと思います。

気持ちよさって何かって言うと、安心できる場でなければ、気持ちよさって感じることはできません。私は恋愛を「接近の技術」だと考えています。他人の身体って怖いものです。殴ってくるかもしれないし、何されるかわからない。そうすると、距離をちょっとずつ詰めていくためには、ここの門を開けて入っていい？ここまで近づいていい？ここ触っていい？この先行っていい？パンツ下ろしていい？というところまで、門がいくつもあるんです。その門を外していく過程に合意というものがあるんです。その合意を交渉する過程で距離を少しずつ縮めていくのが恋愛というもので、そのために恋愛のプロセスというものがあるんだけど、セックスワークって何かというと、その距離をお金で一気に詰める、門を一気に開けるということを男たちがやっているわけですね。

私は女の子たちに、「セックスは気持ちいいものです。気持ちのいいセックスをしてください。気持ちの悪いことはやめてください。あなたの心にもからだにもよくないから」と言いたいです。

◎被害者なのに責められる理由は？

父親から性被害を受けた 19 歳からの質問

中学の時に父親から胸を触られた。これを母親に言ったら、「胸が大きくなったおまえが悪い。おまえが汚い」と言われた。父親に触られた感覚が胸に残っていて、今でも気持ち悪い。なんで母親は自分の味方をしてくれなかったのか。私が嫌いなのか。私が悪いんですか。

会場の大学生①からの質問

ふつうに考えたら、被害者の方が「自分が悪い」と思うのはおかしいと思うんですけど、性的なことって、なぜか女性の方が責められることが多くて、被害者なのに白い目で見られたり。どうしてこうなっているのか。

会場の大学生②からの質問

女性の悩みが同じ女性同士で相互理解が難しい場面があるのではないか。たとえば痴漢やセクハラに遭った女性が PTSD で社会復帰できない気持ちや、そういう経験のない女性には理解できない。男性の無関心はもちろんだが、女性の無関心も、実はこういう状況に加担していきっているのではないか。

上野：女性同士の共感って本当にできないですか。DV 経験率は日本の女性の 4 人に 1 人です。他の 3 人は、「え、そんなことあるの？ 私知らなかった」。本当にそうですかね。例えば私はもう痴漢には遭いませんけども、痴漢に遭った女の子の不愉快さに共感できます。「慰安婦」問題が起きた時も、私は「慰安婦」の立場にはありませんでしたが、でもやっぱりズシ〜とからだにこたえるような痛みを感じました。私は、人間にはたとえ自分が経験していないことでも共感する能力があると思うけれど、発展途上国の子どもにも共感できるのでは。

無関心な女性というのはちょっとわかりません。あなた自身が無関心な女性なんですか？

会場の大学生②：生理の貧困ということを聞いたとき、ほんとかなと思いました。

上野：「ほんとかな」と思った時に、まず一歩踏み出してるわけだから、そこから、調べてみたらいいじゃないですか。調査をした女の子たちも「ほんとかな」と思ってやったわけだから。それは正しい問いだし、共感できないことと同じではないと思う。

ウーマンリブとかフェミニズムが成り立つのは、私が置かれた状況とほかの女性が置かれた状況は地続きでつながっていて、紙一重の差だと思えるからです。私は結婚も出産もしませんでした。でも、結婚して出産してワンオペやっている人の人生も紙一重の違いだと思うから、共感できます。人の話を聞けば、理解もできます。あなたもそうしていただいたらいいと思いますね。

父親から性被害を受けた方の質問に戻りますね。彼女の質問を聞くと、自分の胸に触ってきた父親のい

やらしさよりも、自分を汚いものを見るような目で見た母親への嫌悪感が強いようですね。ということは、母親への期待が裏切られたことに彼女は深く傷ついていて、父親も不愉快だけど、オッサンはこんなもんやとどこかでタカをくくっているのかもしれませんが。父親にこんなことやめてほしいというよりも、母親の態度に深く傷ついている。胸が大きくなったのは私のせいだよ、胸が大きくなったからって性被害に遭うのかよ、と。こんなもの 100%父親が悪いに決まってると思うけれど、ここでは、母親が、娘が大人の女になることを歓迎できないということがはっきり娘に伝わっているわけです。なぜかという、母親自身が、自分が女であることを愛せないからですね。自分が女であるばかりに夫のDVにも従ってきただろうし、嫌な思いをさんざんさせられてきたでしょう。それをずっと呑み込んできた。それと同じ運命が娘にも待っているということを母親自身が歓迎できないのでしょう。

フェミニズムというのは、女が女であることを愛せるための思想です。自分が女であることを愛せない母親は、娘が女になることを歓迎できるわけがありません。それは皆さん方が初潮を迎えたときに、母親がどんな反応をしたかわかります。あんたも女になったのねと汚いものを見るような目で見られたら、一生のトラウマになりますよね。それと同じことを、この娘さんはされたわけですね。では、彼女はもうどうしたらいいのかというと、父親を変えることはたぶん難しいでしょう。いちばん簡単なのは、加害者からの緊急避難です。加害者から離れることです。もうひとつ、お母さんを変えることはできるか。もしかしたら、お母さんを変えることはできるかもしれませんが。それはお母さんが自分を愛せるようになることですね。お母さんが自己肯定できる人生を送れるようになるかどうかです。お母さんを変えることができたなら、お母さんと娘と一緒に闘うことができるかもしれません。お母さんもお父さんも変えることはできなかったら、出てくっきゃないですよ。もう親を捨てたらいいんです。

◎ 虐待を受けた子が自分の人生を取り戻すために

親から虐待を受けていた女の子の声

昔、親に包丁を向けられて「死ね！」と言われたことを思い出して、包丁を見るたびに死にたくなったり、精神安定剤や睡眠薬を大量に飲んで忘れようとして、リストカットの痛みで間に合わせようとして、自分のことを傷つけちゃうのがいちばんつらいです。

保護される前は殴る蹴るの暴力だったけど、保護されて家に帰ってからは包丁を向けられたり、遺書を書かされたりに発展して、保護される前のほうがまだ幸せだったなと思う。

親が「虐待してない」と言っても、子どもに怪我があったら、施設とか里親とか、とにかく親と引き離してもらったほうがよかったなと思います。親に社会的地位があると、大人はみんな親の方を信じて、「この子は嘘をついている」って毎回家に帰される。

今は若草の人から大事にされていて、大事にされている感覚を初めて感じて、やりたいこともみつかって、ちゃんと生きようって思ってるんですけど、でもやっぱり寝る時とか、包丁を見たときとか、節々で昔のことを思い出して、つらくなって、やっぱり死にたくなっちゃったりして。でも、ちゃんと人生を歩みたいという気持ちはあります。

子どもが暴力をふるったらすぐに連れていかれるのに、大人が子どもに暴力をふるってもすぐに正当化されるから、親がちゃんと暴力は悪いって思えるようになればいいなとか思います。

大谷恭子 若草プロジェクト代表理事：児童虐待何万人と言われている時代に、生き延びてきた子が PTSD の症状に苦しんでいる。こういう子が現に存在してます。この子たちが自分の将来をちゃんと描けるようになるまでには時間がかかりましたが、そういう形で若草が関わってきていますので、ぜひ呼びかけ人でもある上野さんに最後に感想を述べていただきたいと思います。



上野：今のお話をきくと、親が「死ね！」って子どもに言う権利が自分にあると思っているのは、自分が与えた命だから、奪う権利もあると思っているんですかねえ。本当に親って、子どもを所有物だと思っているんですね。とんでもない親ですねえ。誰が頼んで生まれてきたのかよって言い返したいくらいのもんですけど。子どもを原家族に戻すのは、やっぱり「家族がいちばん」という神話があるからです。神話ってのは妄想の別名です。根拠がありません。実際は、家族は本当に危険な場所だったり、虐待の温床だったりするんですが。

家族以外に選択肢が子どもたちにないということが本当に問題ですよ。その選択肢をやっとの思いでつくってこられたのが、若草プロジェクトですね。「家族がいちばん」という神話ができた歴史は浅く、これを変えようとしたのが、フェミニズムでありジェンダー研究です。それは歴史を振り返ってみればわかることで、ようやく子どもたちに代替選択肢が出てきて、今の方の発言が出てきたんですよ。そうしたチームの一員であることを、今日は大変誇りに思いました。



第3部 みんなが動き始めた～少女たちは世界を変える

若草プロジェクトメンバーと動き始めた人たちとのトーク

〈若者たち〉

（LINE 相談員） なーちゃん、山ちゃん、みらさん

江連千佳 フェムテックブランド I_for ME 代表

筒井陽子（タキヒヨー株式会社）

須藤順一（日本マクドナルド株式会社）



進行：福田和代（NHK 編成局展開戦略推進部 部長）



◎ LINE 相談を始めた若者たち

福田：LINE 相談を始めた理由は？

なーちゃん（LINE 相談員）：もともと人と話すことに興味があって、LINE 相談員を始めました。相談者の中には想像もつかないような世界にいる人もいますけど、一步間違えると、私と同じような悩みを抱えていらっしゃる人もいるんだというのが大きな印象です。ひとりで世界を変えるのは厳しいかなと思うんですけど、こういうふうにいるいろんな人が集まって、何かを変えたいという思いをもって動いていくことで、変わる世界もあるんじゃないかなと私自身は思っています。

福田：LINE 相談ではどんなことに気をつけていますか？

山ちゃん（LINE 相談員）：いろんな悩みを抱えていらっしゃる人がいて、その中には共感できる悩みもあって、自分がこうだったから、こうすればというアドバイスをしたくなったりもするんですが、やっぱり自分と相手の状況はちがうので、相手の悩みとして受け取ることを大切にしています。

みらさん（LINE 相談員）：相談してきてくれた方に、相談することの価値を感じてもらえることを意識してやっています。具体的には、難しいんですけども、その方の行動を後押しできるような言葉を選ぶようにしています。

福田：LINE 相談員の方へのアンケート結果の中で目立ったのが、「見知らぬ誰かに自分の悩みや思いを打ち明けたい」という言葉です。また、「いい意味でふつうの女の子たちからの相談が多い」という回答もありました。身近な周囲の人に相談しにくいのはなぜなのでしょう。

山ちゃん：悩みのレベルにもよるのかなと思います。日常的な悩みだったら、女性同士で悩みを共有することもあると思うんですけど、LINE 相談に寄せられる悩みは、虐待とか家庭内で嫌なことが起きていることや自分のからだのことなど、周囲に相談しづらい悩みも多いので、顔が見えないけれども信頼できるような機関だからこそ相談できるということがあるのかなと思います。

福田：周囲の人になかなか言えないのは、関係が希薄だからでしょうか。

みらさん：もちろんそれもあると思うんですけども、人によって、関係が濃くても、話したくないとか、話していいのかなとか、関係の濃さだけではない問題もあるのかなと思います。

福田：親しければ親しいほど、逆に自分の心の内を明かしにくくなっていると。

みらさん：そうだと思います。個人的にも、親しいほど、自分としてとらえられてしまうのがイヤと思うこともあるので、悩みを悩みとしてとらえてほしいという気持ちがあると、親しい人にも話しづらかったりするのかなと思います。

福田：周りから「陽キャラ」「明るいキャラ」として認められていると、そうじゃない部分を見せたら、誰かを心配させてしまったり、傷つけてしまったり、あるいは離れていってしまうんじゃないか、そんな不安があるという声も聞いたことがあります。

山ちゃん：そうですね。LINE 相談の事例ではありませんが、児童養護施設にいた 18 歳の女の子から、学校ではふつうに明るく過ごしているけれども、施設から通っていると言ったら、周りの子はどんなふうに反応するだろうか、一歩引かれてしまうんじゃないか、今まで楽しくやっていたのがよそよそしくなってしまうんじゃないかという不安があると聞いたことがあります。だから、関係が濃く、その関係を続けていきたいからこそ、深い悩みというのは言いづらいということもあるのかなと私は思いました。

福田：どんな大人なら相談したいのかを LINE アンケートで尋ねたところ、「話をきちんと聞いてくれる」「意見を押し付けない」など、価値観を押し付けてこない人でした。面白いと思ったのは「学校の先生は口が

軽い」と。あと「利害関係がないけれども、いざとなったら助けてくれる実行力がある人」。

筒井：LINE 相談員の方は、誰かを助けたい、誰かのためになりたいと、一歩踏み出したことがすごい。本当に拍手を送りたいと思います。

お話を聞いて、皆さんがある程度線を引いていらっしゃることがわかったんですけども、私も実は NPO 法人の理事をやっておりまして、相談をやっていたときに陥りがちだったのが、相談員自体が抱えすぎてつぶれてしまったり、元気がなくなってしまうことでした。それで、皆さんには、自分で自分のことをケアできる方法を見つけてほしいなあと思いました。

須藤：マクドナルドは一店舗あたりにだいたい 60～70 人くらいのアルバイトさんがいて、店長にはいろんな相談が来るので、本社内にあるハンバーガー大学でコミュニケーションの教育をしています。コミュニケーションとは、ただしゃべるのではなくて、自分の考えを伝え、相手の考えを聞くことだと我々は定義しています。また、「自分がしてほしいことを相手にしない」というゴールデンルールの中で人間関係をつくっていくことによって、相手の本音を聞き、自分の本音を話す。店長は 2 割話して 8 割聞くアクティブリスニングなどを学びます。そして、聞いたことを絶対ほかの人に話さない。これが信頼だと思います。

福田：若い女性に同世代の女性が相談にのるメリットはありますか？

山ちゃん：やっぱり年代が近いので、自分の実体験や感覚も含めて、悩みを聞いて理解することが比較的容易なのかなと思っています。

みらさん：まだ経験が浅いので、投げかけられる言葉が少ないというデメリットはあると思いますが、一方で、相談者への一方的な支援にとどまらずに、相談員にとっての学びにもつながり、お互いにためになる状況をつくることができているのかなと思います。

福田：悩んでいる若い女性に伝えたいことは？

山ちゃん：悩んでいるときって、ほんとにつらくて、未来が見えないくらいしんどいと思うんです。自分自身も学生時代、行動には移さなかったけど、ちょっと死にたいなあと考えた時期がありました。そのときに「生きていけばいいことがある」と言われても説得力がないですね。だから、きれいごとと言わないですけど、つらいという気持ちを吐き出してくれるだけで、相談員としてはうれしいし、役に立てばうれしいと思っています。

みらさん：悩んでいるのは、自分だけで解決できないから悩んでいるんだと思うんです。自分だけで解決できないということは、自分だけがつくれた状況じゃないと思うんです。だから、ときには、これは社会のせいだと思って、誰かのためだと思って、相談する場所に相談に来てほしいと思います。

◎若い女性が起業すること



福田：江連さんは女性の違和感を解決するプロジェクト I_for ME を立ち上げて、今年 3 月に販売を開始した「おかえりショーツ」が大きな反響を受けているそうですね。

江連：「おかえりショーツ」は、簡単に言うとノーパンでいられる部屋着なんですけれども、去年の 10 月にクラウドファンディングをして 3 月 8 日の国際女性デーに個人事業主として EC サイトで販売を始め、反響を受けて株式会社にしたという状況です。

福田：男性の購入者も多いと聞いたのですが。

江連：妊娠初期の妊産婦さんへのご懐妊祝いの形が多いですけども、男性からの購入が 15%くらいになっています。

福田：そもそもなぜ起業しようと思ったのですか。

江連：もともと起業家になりたくて起業したわけではなくて、個人事業主から始めたと申し上げたとおり、女性に寄り添った商品がないなあと。ショーツと聞くと、V 字型というか、脚の付け根やデリケートゾーンにぴったりついた形を想像される方が多いんじゃないでしょうか。それがつらいという声があっても、なかなか大手の下着メーカーさんが「市場性がない」からと商品にしてこなかったのが、その悩みを持ち、女性のからだを持っている自分がつくることで、何か問題提起にもなるんじゃないかなと。つくっていたら、思っていた以上に「私も悩んでいた」とか、「こういう商品がほしかった」という声をいろんな方にいただいて、もっともっといろんな人に届けられたらいいなというので、ビジネスコンテストでも評価していただいて、環境が整ったので、起業という挑戦をしてみようと。

福田：若い女性の起業については壁があるそうですが。

江連：起業家という立場になっていろいろと見える世界が違ってきました。マンスプ（＝マンスプレイング：男性が女性を見下しながら上から目線で解説すること）とか、たとえば投資をしてもらう代わりにからだ

を売るという話も聞いたり。私の例で言うと、会食の場所はどこですかと聞くと、その人の家の住所が送られてきたりとドキッとするのもいっぱいあって、被害を受けるかもしれないという不安感にさいなまれることはけっこう多いです。

筒井：ほんとに時代錯誤も甚だしいですが、まだそういうことが世の中にはびこっている。たとえば私が働いている中でも、男女のくくりだけではなく年代の差などでも伝わりにくさを感じることはあるので、どうしたら目の前の大人が動いてくれるのかを一生懸命考えて、どう伝えていくかというところも考えなきゃいけないのかなと思います。

江連：私もそれはすごく思ったことがあります。商品や事業の話をするときに、審査員とか意思決定者が男性や年代が上のことが多いので、「なぜ全員男性なんですかね」とか、自分が感じた疑問を声に出したり、どう言ったらそういう人たちの心を動かせるかを考えることも重要だなと思っています。

福田：「男の人も買ってくれています」と、男性主観での話法を持ち出すと興味を持たれるそうですね。それってなんとかならないものでしょうか。

須藤：うちでも女性向けの商品を経営層に提案するときには、女性向けの商品であることをしっかりと提案しないとなかなか通らないことが多いです。やはり、「これだけ女性の声大きい」ということを伝えていくことが大切なのかなと思います。

筒井：とくに数字を打ち出すのが有効ですね。これだけの根拠がありますと。タキヒヨーではレディースの商品を男性の MD がつくることが多いので、男性が女性のバイヤーさんを説得しなくてはならないという逆パターンがあって、それはそれで大変という話を聞いたことがあります。あまり男性、女性と言いたくないのですが、女性が男性を説得するのも、男性が女性を説得するのも、お互いに困りもんだなと思っていることがよくわかります。

福田：最近は「他人の靴を履いてみる」という考えもあって、やっぱり相手の立場への理解や想像力というか、LINE 相談員の人たちも言ってくれたように、彼女たちは何を思っているんだろうと自分の居場所からちょっと出てみる必要があるなと思っています。

◎ 少女たちの可能性をどう広げていくか

福田：マスコミでは「女の子」というと非力な存在を考えがちですが、江連さんと話していて「女の子起業家」という言葉を聞いたときに、恐れずに挑戦する人たち、fearless を強く感じました。ここからは女の子たちの挑戦、可能性をどう広げていけるのかを考えていきたいと思っています。何かこんな取り

組みがあればいいというアイデアはありますか。

山ちゃん： LINE 相談そのままですが、いちばんはやっぱり悩みを吐き出す場所、他人とつながる場所を提供することが支援になるのかなと思っています。よく「大人が信用できない」「公的機関の大人でさえ信用できない」とおっしゃる方がけっこう多いんです。だから、信頼できる大人もいるんだよと、そういう大人と出会う場所を提供することが悩みを吐き出す場所につながって、吐き出された悩みを受け止めることがその先につながっていくと思います。

みらさん： 私も悩みを吐き出せる場所をつくっていくことが大事だと思っていて、リアルな場所だけでなく、オンラインの居場所でも、どんな人でも参加できる場所をつくっていくことが必要だと思います。

江連： 起業とか挑戦をしている女性にも、そういう場所が必要だなと思います。女性の起業家同士のネットワークは意外と希薄で、「こんなことされた」「いやなことがあった」ということもなかなかシェアされないの。それと、契約などでいろいろトラブルが起きたとき、かなり専門的な知識がないと泣き寝入りするしかなく、弁護士に相談するのも若手の起業家にとっては痛手なので、ちゃんと相談できる場をつくるべきだなと思っています。

大谷： 弁護士も役割を果たしていきたいと思いますが、弁護士には見えない、生活のことやアイデアなどもあるので、実は弁護士にも支援が必要なんですね。私はこの若草プロジェクトに入って、本当にいろんな人がつながって、連携し合いながら、一人の人を支えることが一番大事だなとつくづく思っています。



筒井： タキヒョーではまちなか保健室で女の子たちと直接しゃべるイベントをさせていただきました。その中でいちばん気をつけないといけないのは、押しつけないサポートだなと。本人たちが望んでいることをしっかりヒアリングして、私たちが勝手にこれがいんじゃないかと思っていることを押しつけないことを心がけていかないといけないと感じました。

須藤： マクドナルドからは、2つ提案を。まずは職場と仲間。全国に 2950 店舗あり、各店舗にアルバイトが 60～70 人います。その仲間になっていただく機会をつくれるかなと思います。もうひとつは LINE 相談員の方に、ハンバーガー大学のコミュニケーション授業を受けていただく機会を提供できると思います。

福田： 具体的な提言をありがとうございます。

最後に、このシンポジウムに参加できなかった LINE 相談員のおひとり、みづきさんからメッセージを預かっていますので、ご紹介します。

〈みづきさんのメッセージ〉

第 3 部のテーマである「少女は世界を変えられるか」という問いに対し、私は「変えられない」と答えると思います。相談者の少女のことを考えると、彼女たちが世界を変えるのは困難です。ただ少女の声が鍵になって世界を変えることはできるかもしれない。私たちが見つけて、声を聴き、拾い上げて代弁することにより、実現すると思います。数年後、同じ質問を問われたときに、「少女は世界を変えられる」と答えられますように。

福田：今、世界では「シスターフッド」という言葉も注目されています。一人一人の取り組み、連帯が、最終的に世界を動かしていくんじゃないかなと強く感じました。今日は皆さん、本当にありがとうございました。



閉会の挨拶

大谷恭子 若草プロジェクト代表理事

本当にお疲れさまでした。最後まで残ってくださった皆さん、ありがとうございました。2 年ぶりの開催ということで、私たちは開催することだけに注力してきましたけど、久しぶりでちょっと時間管理を忘れてしまいました。本当に失礼いたしました。

これからも私たちの活動は続きますので、どうかご支援いただきたいと思います。

本日はありがとうございました。

